

帰国、カルチャヤー・シヨツクの驚き

千葉県 樋口 濟

一 生い立ち

私は、昭和三（一九二八）年七月に長春で生まれた。当時は満州国が建国される前なので、支那で生まれたことになる。私の戸籍謄本には次のように記載されている。

「昭和参年七月式拾式日支那吉林省長春南満州鉄道付属地平安町参丁目満鉄社宅四の八で出生、父 樋口市太郎届出 同月参拾壹日受付入籍」

私は、五人兄弟で、女、男、女、男、女の四番目で次男である。この兄弟全員が満鉄社宅で生まれ育ったことになる。満鉄あつての我らが人生、満鉄無くして我らが人生を語れないとも言えよう。

二 石炭の都、撫順

物心ついたころには、私は蘇家屯の満鉄社宅に住ん

でいた。生後、父の転勤に伴って長春から撫順を経て蘇家屯に移り住んだ。

長春時代のことは、生後間もなく離れたこともあって全く記憶にないのは当然であるが、次に移り住んだ撫順での生活については、断片的ではあるが覚えてい

る。
満鉄社宅街は、各家庭には暖房が行き届き、冬の暖かさは快適そのものであった。石炭の豊富な撫順なので、満鉄社宅の暖房は石炭を燃料とした先進的地域暖房システムが採用されていた。全戸に蒸気を送りラジエターが完備し、給湯が行われていた。水洗便所などの設備面でも、総じて当時としては最高水準の住宅環境であったと言えよう。

撫順の石炭は漆黒に光り輝き、黒ダイヤと呼称されていたが、燃料としてだけではなく彫刻の素材にもなっていた。我が家にも、布袋さまほかいくつかの石炭の彫り物が床の間に飾られてあったが、とても石炭から作ったものとは思えない立派な美術工芸品であった。

三 匪賊の来襲

撫順時代で忘れられないことは、匪賊に襲われて、母親に手を引かれて逃げまどったときの怖い思い出がある。

幾度か体験させられたこの恐怖の逃避行は、今になっても忘れることができない。この匪賊は赤い房を穂先に結びつけた槍を持ち、馬に乗って日本人街に入ってきて襲撃し、略奪をほしきままにしていた。捕まったら殺されると母から聞かされていたので、本当に怖かった。

ある日のこと、夕食時分に匪賊の襲撃を受けた。住宅街の塀の外側には、歩兵砲や機関銃を構えた独立守備隊の兵隊が大勢いて、我々が逃げるのを守ってくれていた。また、当時旅行中に列車が匪賊に襲われたことも何回かあった。そのころ満州では、長い列車の真ん中ぐらいと、最後尾には装甲車が連結されていて、鉄兜をかぶった兵隊が車の屋根から顔を出して機関銃を構えて、鉄道線路の左右を警戒していた。匪賊は、線路沿いの高粱畑の中から姿を見せずに列車を目掛けて襲撃して来る。それを、装甲車から機関銃で射撃し

ていた。鉄兜をかぶった兵隊が、客室の通路を大声で、「窓のブラインドを閉めて、座席の下に伏せろ」ということを怒鳴りながら走り回った。鉄道線路の両側は五十センチメートルぐらいの幅で、草が短く刈り取られてあり、その先には高さが二メートルはあるうかと思われる背の高い高粱畑が広がっている。匪賊は、この高粱畑の中から列車を目掛けて襲撃して来るのだが、高粱畑には機関銃の弾でも通らないということを聞かされていた。

当時の撫順地区は、よほど治安が悪かったのである。小学生の通学時には、兵隊が付き添い警備してくれていた。そんな状況から、我が家では家族の安全を期するために、父を一人残して、母に連れられて母の郷里である宮崎市に避難帰郷することになった。いわゆる疎開の走りということである。帰郷後は、もの珍しい日本内地の生活を楽しんで過ごしていた。

一年後に再び撫順に戻った。そのころになると治安も回復して、既に撫順は平和で静かな街になっていた。

四 蘇家屯の思い出

昭和九年、父の転勤に伴って蘇家屯に移り住んだ。蘇家屯の住宅は二階建ての大きな家で、庭も広く隣の庭とは金網のフェンスで仕切られていた。住宅の前には広い道路があり、その突き当たりに父の勤務先である蘇家屯満鉄病院があった。この職場では、社員の家慰安行事が盛んであった。その中でも秋の「ジンギスカン鍋」が大好評で、病院の広い芝生の庭にたくさんのコンロを据えつけ、羊の肉を野菜と一緒に「ジュウジュウ」と焼きながら食べるのは本当においしく、かつ楽しいことだった。

当時は関東軍の軍事演習が盛んで、演習参加の兵隊は民家に分散投宿するのが普通であった。我が家には、いつも高級将校が数人泊まっていた。

五 家族旅行の思い出

我が家では、父に連れられて家族旅行によく出掛けた。また、毎年のように内地から親せき知人を招き、満州各地の観光地を案内するのが常であった。このときは家族全員が参加していた。

旅行に出掛けるときは、いつも汽車は一等車であつ

た。父の持っている「一等バス」で、豪華な一等車に家族はただで乗ることができた。このことは、子供心にも何とも誇らしく思い快適であった。特急「はと」に乗ることが多かったが、一等車は床に分厚いじゅうたんが敷き詰めてあり、乗車するとすぐに白手袋をしたボーイさんが来て、靴をスリッパに履き替えさせてくれる。そして、次には熱い日本茶のサービスがあった。そのうちに新聞記者が回って来て、一等車の乗客から名刺を要求し、行き先、旅行目的などを取材し、手帳に書き込んだ。それらの情報は、翌日の朝刊紙の一面下部の「人事往来」欄に、要領よくまとめられて掲載することになる。父はいつも名刺を渡しながら、「今日は、家族旅行なので」と丁寧に断っていた。

昼近くになると、ボーイさんがメニューを持って昼食の注文をとりに来る。そしてこちらから希望した時間になると、食堂車に案内してくれる。下車駅が近くと、ボーイさんは磨きあげた各人の靴を持って来る。下車の際には荷物をホームまで運び、赤帽を呼んで手渡してくれた。まさに至れり尽くせりの、大名旅行の

気分を満喫したものだ。こういうときは、チップを渡すという大人のエチケットを父から学んだことだった。

温泉にもよく連れて行ってもらったが、主として毎年のように熊岳城という温泉場に行った。ここは砂風呂で有名だったが、楽しい思い出がたくさんあるが、戦局が厳しくなるにつれて、この温泉場は関東軍の傷病兵専用となり、一般民間人は入れなくなった。

満州には、熊岳城のほかに湯岡子温泉があったが、設備が良くないために、我が家では一回行っただけで二度と行くことはなかった。

六 エキゾチックな街・ハルピン

満州の観光地で最も印象深い、エキゾチックな街はハルピンである。

ハルピン駅の構内には、天井の高い立派な礼拝堂があつて、人目を引いていた。胸の前で十字を切り、祈りを捧げる白系ロシア人の姿が後を絶たない。キタイスカヤ通りはきれいな石畳で、両側にはロシア風建築の商店が立ち並んでいて、白系ロシア人が行き交い、

どこかの外国にきたような感じを受けたものだった。

ロシア正教会の教会周辺には、白系ロシア人女性の物乞いが大勢いて、日本人観光客と見ると、それらを取り囲むようにしてしつこく物やお金をねだり、つきまとつていた。黒い汚れた頭巾から、尖った高い鼻が見えて、絵本に出てくる魔女のようで怖かったことを思い出す。足元までもある黒く長いスカートは汚れて不潔たらしく、決まって幼児の手を引きながら同情を誘つていた。そして、何やらお念仏のようなものを唱えながら、観光客につきまとつた。その念仏は、よく聞くとどうやら日本語らしく「なむおだいしさま！ 南無お大師様！」と唱えているように聞こえたが、母に聞いてもよく分からなかった。

夏は、スンガリー（松花江のこと）での、ヨット遊びが楽しみだった。太陽島では白系ロシア人の娘たちの肌もあらわな水着姿に、子供心にもまぶしかった記憶がある。

また、郊外には「沖・横川烈士の石碑」に花を供え、父から日露戦争当時の彼らの活躍ぶりを聞いて、胸を

踊らされたものだった。

ハルピンでの大型観光バスは、ベントで日本人のガイドさんが、和服の振袖姿で愛嬌を振りまいていたことが印象に残っている。

七 四平街から旅順へ

昭和十一年四月、父が蘇家屯満鉄病院から四平街満鉄病院に転勤になり、我々家族も四平街の満鉄社宅に移住した。

ここで、私は四平街尋常高等小学校の一年生に入学した。兄も同じ学校の五年生に、姉は四年生にそれぞれ転校した。そのころになると満州の治安は良くなり、四平街でも平和な生活ができるようになった。兄も姉も優秀な学業成績を修めて、勉学に励んでいた。当時の我が家の教育方針では、みんな将来は旅順で学ぶ事を目標にしていたし、旅順で生活することにあこがれを抱いていた。具体的には、男の子は旅順中学校へ、女の子は旅順高等女学校に進学することであった。

満州では働く者にとつて、旅順という地名は特別なイメージを持っていたように思われる。旅順が満州で

内地に最も近いことに加えて、日露戦争の歴史ある輝かしい聖地としての響きは、独特な魅力を持っていたように思われる。特に、新市街は学校教育面からみても、学園都市さながらの閑静な環境に恵まれていた。

旅順工科大学、旧制旅順高等学校、旅順師範学校、旅順中学校、そして旅順高等女学校、また、師範学校附属小学校は白亜の殿堂のごとき、立派なロシア式建築の校舎・寄宿舎を持ち、子弟教育には理想的な環境であった。我が家でも、兄が昭和十三年に旅順中学校に進学、翌昭和十四年には姉が旅順高等女学校に入学し、それぞれの寄宿舎に入った。

昭和十四年の五月には、私も妹もいずれは旅順で学ぶことになるのだからということで、母と共に旅順に移転した。父はそれ以来単身赴任となり、満州各地で勤務を続けることになった。毎月一回、旅順に帰宅するという別居生活は終戦まで続くことになった。

旅順での生活は、満鉄留守家族制度により社宅が与えられ、快適そのものであった。社宅は、関東州庁が昭和十二年に旅順から大連に移転した際に、判任官用

の官舎を満鉄が譲り受けたものと聞かされていた。間取りは親子四人には充分であり、広い庭には洋ナシやナツメの樹が数本植えられていて、楽しい生活が始まった。通学でも旅順中学校、旅順高等女学校、そして附属小学校ともに、徒歩で十分から十五分ぐらいの近い距離にあった。また周辺の景観も、旅順港が眼下に見おろせた。

旅順は満州の最南端に位置するが、冬になると池などは全部凍結して、アイススケートが楽しめた。毎年の十二月から三月の初めまでは、大正公園の池、扶桑町の池がスケーターで大賑わいとなった。

真夏になると、旅順港を横断する遠泳訓練や黄金台海水浴場での水泳訓練で随分と鍛えられた。後の話で、引き揚げてから「満州育ちにしては、水泳が上手だな！」とよく言われたが、旅順での生活がなかったならば、それほど上達はしなかったに違いない。

昭和二十年八月二十二日に、ソ連軍が旅順市内に進駐するまで、すばらしい学園生活ができたことを、両親に感謝している。

八 学徒動員

(一) 関東神宮造営奉仕

中学生になって最初の学徒動員は、勤労奉仕から始まった。昭和十七年四月に旅順中学校に入学したが、毎週一日は関東神宮造営の勤労奉仕に狩り出された。関東神宮は、昭和十三年六月一日付の内閣告示第三号を以って創建された官幣大社で、天照大神と明治天皇の二柱がご祭神である。日露戦争の結果、遼東半島が関東州となって日本の統治下に帰属し、関東州に居住する日本人の数が遂次増加するに従い、民心の帰属を図るために当局の施政三十周年記念事業として、国費をもって創建された神宮である。関東神宮の造営地は、広大な地域を擁する大正公園であった。この公園は旅順市民の憩いの場として広く親しまれていた。ことに公園内にある大正池は、前に書いたとおり冬季は自然のスケート場となって、市民にとっての絶好の練習場であった。

この大正公園を全面的に改造して、新たに関東神宮境内を造成することは大土木工事であった。当時は、ダ

ンプカーもブルドーザーもない時代なので、工事の大部分は人力に頼らざるを得なかった。

勤労奉仕は、学徒中心に組織的に行われることになり、作業内容は土砂運搬が中心で、モッコに土砂を投げ入れ二人で担ぎ運ぶ単純な作業であったが、慣れない肉体労働に最初は随分とこたえたが、すぐに慣れて、夏場は上半身裸になってモッコを担いだ。

昭和十九年九月二十八日、関東神宮では御霊代の御奉迎が行われた。御霊代は勅使に捧持されたが、この儀式に際して、私は今に忘れられない思い出を有している。それは「関東神宮」―悲劇の三百二十二日―という書物で、関東神宮神官であった石川氏の著書である。その一〇六頁に次のごとく記されている。

「大島居前から御霊代御唐櫃を奉持し、斎館まで供俸する白丁四人を、旅順中学校生徒の中から選抜することとなった。数多くの生徒の中には、その選に入ることを熱望する者もいたが、学業優秀で品行方正、二両親健在のうえ身長類似という条件を基に、学校長の推薦で、樋口濟君等四人が嚴重に選抜された。身体検

査を経て選抜された四人は、神宮に挨拶に来て、佐藤宮司や、山本禰宜とも面談した。四人はいずれ劣らぬ眉目秀麗で立派な体格。しかし、まだどこかあどけなさの残る若者だった。」(以下略)

(二) 土城子飛行場建設

三年生になると、旅順郊外の土城子に海軍が飛行場を建設する作業が始まった。木造の兵舎に寝起きして、一週間交替で作業に取り組んだ。ブルドーザーもショベルカーもない時代のもので、手作業で飛行場を造るといふ、気の遠くなるような作業に明け暮れた。作業内容は、滑走路の基礎工事で、ツルハシ、スコップを使って草原を切り開き、残土をモッコで運び出すという単純作業である。参加校は、日本人の学校のみならず、中国人の中等学校も動員されていた。かなりハードな肉体労働であったが、「国のため」「戦争に勝つために」という熱い思いを心に秘めた軍国少年たちは、黙々とひたすら苛酷な労働に耐え、文句も言わずに作業に取り組んだ。不平・不満もあつたであろうが、第一線の兵隊さんたちの労苦をしのびながら、だれ一人

それを口にする者はいなかった。

兵舎での生活は、内務班と称する軍隊式組織の編成で、規律正しい生活を強いられた。日中のハードな肉体労働に疲れ果てて、教科書などを開く元気はなかった。

この兵舎は幾棟もあり、他校の生徒たちも学校ごとの棟に起居していた。血の気の多い若者集団であり、ときにはささいなことから他校の生徒とのけんかざたも見られた。

食事は炊事当番が交代で作ったが、当時十三歳ぐらいの少年たちが何を作ったものやら、とにかく教官も一緒に団体生活が維持されていた。生徒に嫌われている教官にはふけを混ぜた、いわゆる「ふけ飯」を食べさせたりしたのも懐かしい思い出である。

一週間の土方生活が終わると学校に戻り、一週間で教室での学習にあてる生活の繰り返しであった。そのころから、英語は敵性語であるからとの理由で授業が廃止された。私にとっては、英語は好きな学課で成績も良かったので残念だった。敵を知るためには敵の言葉を学ぶべきではないか、との個人的な不満があった

が、当時の日本国政府の方針であり、文部省通達によるもので、やむを得なかった。

(三) 甘井子軍需工場への動員

三年生の二学期からは、本格的な軍需工場への動員が開始された。我々の学年は大連の甘井子に動員されて、「進和鉄工」という会社の独身者寮に入った。寮は木造二階建てで、六畳間に四人が生活することになった。

この会社は、鉄鉱石破砕に使うステイル・ボールを主力製品としていたが、製釘工場では釘の生産も行っていた。私たち日本人学徒が動員されるまでは、工員全て中国人であったので、我々は中国人の工員たちと一緒に油にまみれての工員生活に明け暮れることになった。

この工場では、作業だけではなく授業も行われた。授業は会議室を使って、四クラス編成の担当教官が国語、歴史、数学、英語の教官であったので、英語を除く三科目を毎週一時間ずつ勉強した。しかし学力の低

下は著しく、向学心は頓とまにうせていった。

工場では、中国人の少年工との交流により喫煙を覚える生徒が増えてきた。寮の便所でひそかに喫煙する生徒がいて、教官が便所の窓から流れ出るタバコの煙を見張り、犯人を捕まえたりしていた。生意気盛りの生徒たちの監督には、かなりてこずったことと思われる。ちなみに、喫煙に対する処分は、通学生は自宅謹慎、寄宿舎生は保証人宅での謹慎、各一週間を命じられた。

(四) 対空監視哨勤務

昭和二十年四月からは、対空監視哨勤務につくことになった。監視哨は旅順市西部郊外の羊頭湾（ヤントウワン）にあった。遼東半島の南西端、渤海湾に面した小高い山の上である。監視哨勤務は八人体制で、警察官の哨長がいて駐在所の官舎に家族と一緒に住んでいた。小野さんという、小柄の温和なタイプのお巡りさんであった。監視哨勤務につくときには、旅順市警察本部で一週間分の食糧として米、みそ、醤油などを

受け取り、トラックに積み込んで現地へ向かった。食糧は潤沢に持たされたので、現地で地元の中国人と交渉して米などをタバコ、老酒（ラオチュウ）、黄酒（フオンチュウ）などと交換するつわものもいた。

私たちの任務は、旧式の古ぼけた双眼鏡で敵機来襲に備えて交替で空を見張ることである。敵機襲来を見したら、ただちに警察本部へ電話で急報するのが任務である。敵機を肉眼でとらえること自体がかなり手遅れであり、それを本部へ報告したからといっても、ただちに我が軍の飛行機が飛んでくるわけでもなく、なんともむなししい思いで毎日毎日空をにらんでいたものである。事実、あるときには、貨物船とおぼしき船が遙か彼方の沖合で沈められたことがあった。船が船尾からゆっくりと沈没するのを双眼鏡で確認していたが、興奮で胸が高鳴るのを抑えながら本部に急報した。三十分ぐらいしてオートバイに乗った警官が到着したときには、船は完全に沈没して姿は見えない。発見したときの状況を詳しく報告したが、警官はなすすべもなく戻って行った。そのころになると、制海権は既に

我が日本海軍のものではなかったのかもしれない。

それから数日後に、それを暗示するような出来事が起きた。その日は、真夏の暑い日照りのまぶしい日であった。中国大陸の山東半島から日本居留民がジャンク（中国の大型帆船）で漂着した。着の身着のままの姿である。甲板上に鈴なりになった避難民が、こちらの湾に向かつて来た。手旗信号で問いかけると、「八路軍に襲われて逃げて来た。何日も飲まず喰わずで疲れ切っている！」という返事が返ってきた。

取りあえず湾の入口に停泊してもらい、本部に急報した。双眼鏡で見ると、ぼろぼろの衣服を身にまとった人々が、疲れ果てた格好で折り重なるようにしている。ほどなくして本部からオートバイに乗った憲兵と、数人の警察官を乗せたトラックが来た。憲兵たちは私たちを遠ざけて、ジャンクに乗り込んだが、間もなく避難民全員をトラックに乗せて慌ただしく去った。そのあと憲兵がやって来て、「このことは絶対に口外しないように」と厳しい怖い表情で言い残して、再びオートバイで帰って行った。

海の向うの中国大陸、山東半島における我が日本軍の敗戦状況を目の当たりに見せつけられて、一同は背筋が凍る思いで、しばらくは言葉も出なかった。

この監視哨勤務も、一週間勤務して帰宅し、次の一週間は自宅から通学して勉強する、というパターンの繰り返しであった。監視哨勤務の間は、一週間着のみ着のまま入浴もできないような不潔な生活であった。帰宅しても、母は玄関から中には入れてくれなかった。まず着ている物を全部脱ぎ捨て、裸で風呂場へ直行させられた。この入浴で、一週間の疲れが吹き飛ばすほどいやされて、楽しかった。文字どおり、生きるという思いに浸ることができた。

衣類は、縫い目に虱しらみがもぐり込んでいたので煮沸消毒をする。それでも戦争に勝つために、第一線の兵隊さんの苦勞をしのびながら、不満もなくひたすら耐える生活の連続であった。

九 八月十五日の詔勅

八月十五日は、前日に監視哨長から「明日の正午に

重大放送がある」と告げられていた。内容は不明であるが、国民に対して戦局は不利であるが、今こそ一致団結して耐えしのぶように、との励ましの言葉があるに違いないと期待しながら、ラジオを囲んで放送を待った。このラジオは、通称並四と呼ばれている性能の極めて低いものであった。放送が始まって雑音がひどくてよく聞きとれないが、天皇陛下、自らのお言葉であった。当時、天皇陛下の生の声を玉音といったが、一般国民がそれを耳にするのは初めてのことであった。ラジオが粗悪だったのか、天皇陛下の朗読調の節回しに影響したのか、何を告げておられるのか表現が回りくどくて全く分からなかった。戦争に負けるなどとは、夢にも思ったことのない身としては、苦しいだろうが頑張つて欲しいとの励ましのお言葉のようにも受け取れた。

しかし、実際の内容は違っていた。哨長は「戦争に負けたのだ！ 重大なことなので天皇陛下が直接にお言葉を賜ったのだ」と私たちに冷静に語りかけ、さらに言葉を継いで「今後のことが大切だ。今後は負けた

国をどのように立て直すかを考えて、気持ちを入れかえて生きていくことが大切だ！」と、静かにしかも諄々として諭した。小柄なものの静かな人柄の警察官が、興奮することなく淡々と言葉を続けていた。

負けるはずが絶対にない戦争に負けた。青天の霹靂に茫然自失、敗戦の現実が理解できずに気が動転し興奮している軍国少年たちは、哨長の冷静な訓示によって徐々に我を取り戻し始めた。「いやだ！ 俺は最後まで戦うんだ！」とわめいた仲間もいたが、いつしか哨長の言葉に耳を傾けるようになった。

ずっと後年になって、あの終戦の詔勅を読む機会があったが、どこにも「日本は戦争に負けた。降伏する」とは書かれていない。あの聞き取りにくいラジオ放送を正しく理解し、血の気の多い軍国少年たちを冷静に諭した哨長の、冷静にして毅然たる態度は、いまだに忘れることができない。

その後、本部から連絡があり、迎えのトラックで引き揚げるように指示された。窓外に目をやると、監視の麓ではスコップや丸太を構えた中国人の集団が、

大きな声でどなり合いながら我々の食糧倉庫から米などを略奪するのが眼に入った。監視哨に登って来ないのは、哨長がピストルを持っていることを知っているからに違いない。

思ったより早く、警察本部からの迎えの車が到着した。群がる中国人たちをかき分けるようにして、車はバックで登って来た。私たちは、一斉に後ろから荷台に飛び乗った。群衆は、口々に汚い言葉でわめき散らしながら、車体を丸太などでたたいて後ろから追って来た。幸いにしてだれもけがをすることもなく、無事に脱出に成功した。お互いに血の気のうせた顔を見合わせ、しばらくは言葉も無かった。

羊頭湾からの帰途、意外な光景に我が目を疑った。沿道の中国人民家には、青天白日旗が掲げられているではないか？ 私たちは、今の今まで戦争に負けた事実を夢想だにしていなかったのに、かれら現住民は一般大衆に至るまで、既にこの事態を予知していたことである。

今日に備えて、各家では青天白日旗が用意されてい

たことになる。そうでなければ、この時期に掲げられるわけがない。戦争末期における軍や、憲兵による言論統制の厳しい中で、この地下工作が着々と進められていたことを知り、がく然とした。

十 旅順から大連への強制移住

昭和二十年八月二十二日に、ソ連軍は旅順市街にも進駐して来た。それからの旅順はソ連軍兵士による日本人居留民への略奪・暴行などの数々の行為は、目に余るものがあつた。

しかし、満州を経て大陸の最南端の旅順に来た彼らは、ときの経過と共にある程度はおとなしくなつていたようで、終戦直後の満州、特に満州奥地で繰り広げられたという悲惨極まりない暴行の数々に比べると、かなり落ち着きを取り戻していたようにも感じられた。一説によると「第一線に狩りだされたのは、囚人部隊なので獐猛極まりないのだ」と言われていたが、ソ連軍全体の軍規のレベルがこの程度のもので、戦後の記録で知ったことである。

十月になって、突然に旅順新市街からソ連軍によつ

て追い出され、旧市街に移った。そこで落ち着く間もなく、大連にと追い立てられるようにして移った。

大連で一冬を過ごし、引揚げを待った。

十一 カルチャー・シヨック

昭和二十一年三月十日、私たちを乗せた引揚船は日本の本土に接近していた。

大陸生まれで大陸育ちの身にとつては、島国日本を見る目は異国人の目と同じであった。カルチャー・シヨックの第一歩は、引揚船が日本本土に近づいたときから始まった。「日本が見えるぞー」と言う引揚者の弾んだ声に、船倉に押し込まれていた引揚者集団は一斉に甲板に駆け上がって来た。

目の前には、小高い緑の山並みが見える。澄み切った青い空、初めて見る祖国の空に山の緑が濃く映えて、なんとも美しい景色である。これまでの苦勞、収容所でどのつらい思いなどは、一瞬忘れ去ってしまうほどに身も心もいやされる思いに浸ることができた。

それにしても驚いたのは、緑の山が頂上に至るまで山々の天辺までも見事に耕されていることであった。

段々畑の話は聞いていたことがあるが、これぞ段々畑そのものなのだと思銘を深くした。お百姓さんが、これほどまでに勤勉に農作業に励む事象をまざまざと見せつけられて、あまりにも見事な開墾ぶりは驚異であった。

満州生まれの満州育ちの私の常識では、畑仕事のような肉体労働は中国人がする仕事で、日本人が手を下す仕事ではないと頭から思っていた。別に教えられたわけではないが、そのような環境に生まれ育った身にとつては、お百姓さんの山頂までの段々畑は驚異であり、カルチャー・シヨックの第一歩となった。

十二 引揚者収容所でのこと

引揚船を降りて収容所に入れられた。収容所は、旧海軍の兵舎とおぼしき木造の平屋建てであった。収容所に入る前に、真っ先に洗礼を受けたのは、D・D・Tの消毒であった。一見して日本人のような顔をした小柄な日系二世の米兵が、細身の空気銃のような小銃を構えて、銃の筒先で追い立てるようにして屋外に一列に並べた。ついで噴霧器のような金属製のホース

の先から、D・D・T粉末を噴射した。頭の前から首筋から、着ているものの袖口からなど体の隅々へ噴射され、全身白い粉だらけにさせられた。扱いは極めて乱暴なもので、有無をいわせないという態度でひどいものであった。しかし、不潔な引揚者を消毒する手段としてはD・D・Tを吹きつけるのが一番手っ取り早く、即効的であることには違いはないと思った。とはいえ、この手荒い洗礼には驚かされ、かつ屈辱感を覚えたものだった。「今や敗戦国民なのだから、文句を言うまい、これから、もつともつと嫌な仕打ちを受けることがあるに違いない」と自らにいい聞かせ、納得させてこの洗礼に耐えた。

一夜明けるとすぐに、日本人の係官の呼び出しを受けて屋外に出た。なぜ自分だけが呼び出されるのか、まったく分からなかったが、不安顔の両親に見送られて外に出ると、そこには小銃を肩にかけた小柄な日系二世の兵士が待ち構えていて、日本語でついて来るように言われた。命令調で、しかも銃を構えて自分の前を歩くように銃の筒先で指示した。かまぼこ型の兵舎

らしき建物の中に入れられて、小部屋で待たされた。部屋の壁には、拡大された大連市街地図がはりめぐらされてある。しばらく待つと、アメリカ人の将校らしき白人の大柄な男性が笑顔で入って来た。これが鬼畜米兵だと思ふと体が極度に緊張して、身震いする思いに襲われた。生まれて初めて見るアメリカ人である。身の丈二メートルはあるかと思われる大男が、ポケットからキャンデーを一つつかみテーブルの上に広げて、突然ロシア語でキャンデーをすすめたのには驚いた。私は「スパシーボ」と口に出すのが精一杯であった。さらに驚かされたのは、私がロシア語と中国語の二等通訳の資格を持ち、終戦後の大連で「ソ連塩業管理局大連司令部」でロシア語と中国語の通訳をしていたことを、彼らが知っていることであった。

この米兵は、恐らくアメリカ進駐軍のロシア語専門の情報将校に違いないと思った。大勢の引揚者の中から、いち早く該当者を見つけ出す情報力には驚くほかはない。ロシア語でのとりとめのない会話が続いた後、彼は日本の平和のために協力してほしいと言い残して、

笑顔で立ち去った。私は、ほっとしてキャンデーを一つ口に入れた。こんなにおいしい菓子があるのかと改めて驚き、こんなやつらと戦っても勝てるわけがないと妙なことを考えながら味わった。思うに、この面接は私のロシア語会話能力のレベル・チェックであった。ならば、この次には中国語のチェックがあるのかと身を硬くしていると、次に入って来たのは若い日系二世の兵士で、流暢な日本語をソフトな口調で話し始めた。引揚げの苦労話を聞き出すことからやりとりが始まったが、テーブルの上に広げられたカラー刷りの分厚い写真集はソ連軍の戦車、大砲、銃器の写真が満載されていて、さらにはソ連軍の軍服、階級章の一覧もあった。この米兵の言葉は丁寧であるが、質問内容は尋問取調べそのものであった。例えば、「どのような戦車部隊が、大連市内のどこに駐屯していたか?」「どこで見掛けたか?」「その後どのように移動したか?」などを壁にはり巡らしてある大連市街地図を指し示しながら、しつこく求められた。また、そのときに見掛けたソ連兵の服装、階級章についても、同様な質問を受けた。

私が旅順を追われて大連に移ったのは、昭和二十年十月であったが、その後昭和二十二年三月に引き揚げるまでの間のソ連軍の軍備状況について、見たこと聞いたことをなんでも教えて欲しいと要求された。

昼食は、久しく口にしたことのない肉料理が真っ白い米飯と共に用意され、何年ぶりかのまともな食事でありつけた。飲み物として、しょうゆのような濃い色の葉臭い飲み物が瓶ごと出た。コカ・コーラと書いてあるが、においがきつく鼻につき、飢えた身にとつても口にできるものではなかった。

翌日も朝から呼び出された。今度は、旅順関係のソ連軍に関する情報を中心とした取り調べであつて、尋問者は別の日系二世であつた。今日は、壁に旅順市街地図をはり巡らせた部屋だつた。大連地区と同様に情報提供を求められたが、特にソ連軍の旅順市内に進駐した日時、その当時のソ連兵の携行武器、服装、さらに疲弊の状況についての質問が繰り返され、厳しいものだった。さらには、進駐直後の旅順市内の治安状況に關しても、しつこく情報を求められた。アメリカは、

このようにして引揚者からもソ連軍のホットな情報を収集していることを知り、珍しくもありまた驚きでもあった。

さらに驚かされたのは、その翌日、三日目のことであつた。一昨日、昨日の二日間にはわたる取り調べで終わりだと思つていたら、さにあらず、今度も担当者が替わつて別の日系二世が現れ、大連、旅順地区に関する情報を前日までと全く同じことを聞かれた。理由はすぐに分かつた。前日までの話の真偽を確認しているのだ。一部分、戦車部隊の移動時期が違つたために、さらしにつこく問いただされたのには閉口した。取り調べ中に飲み物が出されたが、前回同様のコカ・コーラと赤い字で書かれた、薬臭い黒色をした飲み物なので、口をつけなかつた。見てみると、取調官の米兵はおいしそうにラツパ飲みしていた。

その翌日の四日目には、旅順情報の取り調べがあつたが、今度はあまり緊張することなく終えた。しかし、この件はこれで一件落着とはいかなかつた。

その後、引揚げ先の新潟市に落ち着いたときに、情報

収集したのは米軍CICの仕事であることが判明した。というのは、落ち着き先にCIC新潟司令部から呼び出され、接収されていた旧イタリア軒に出頭を命じられたが、ここがCICの事務所になつてゐることが分かつた。

アメリカ人が日本語で、今後居住地を離れるときには、必ずCICに事前に届け出るように言い渡された。行動を束縛されることは納得し難いので、法的根拠をたざしたが、これはGHQの命令であり、占領下の日本人としては当然に順守する義務がある、違反すると法的措置がとられる、日本国民は講和条約の発効まではGHQの命令に従つてもらふ、と厳しい口調で言われ、サインを求められた。敗戦国民に対する戦勝国の取り扱いはこのようなものかと、帰国後初めて敗戦国民の悲哀を実感させられた。この行動制約は、昭和二十七年四月二十八日の講和条約調印の日まで続くことになる。

十三 引揚地新潟に向かう

引揚列車には、まず荷物が先に積みこまれ、人間は

荷物の上から天井までの空間に寄せられた。いな、乗せられたと言うよりも、荷物同様に乱暴に積み込まれたと表現した方が、実態に合っている。当然ながら、窓は荷物でふさがれて車内は薄暗く、窓外の景色などは見られる状態にない。このような窮屈な状態で、列車は九州から本土に向かって発車した。列車が駅に止まり、引揚者が下車するにつれて、人と荷物がだんだんと減っていく。本土に入るころには、どうにか窓外の景色が目に入り始めた。

ここで目に入った光景に、強烈なショックを受けることになる。カルチャー・ショック第二弾である。それは、なんと道路工事をしている人夫が日本人ではないか。日本には日本人しかいないのだから、日本人が作業に従事することは至極当然のことではあるが、このような現場の肉体労働はもっぱら中国人の仕事で、日本人のするものではない、という環境に生まれ育った身にとり、この現実には誠に衝撃的であった。さらに驚いたことは、よく見るとその人夫集団の中に女性がいないではないか？ これには心底ショックを受けた。

満州大陸では、苦力と呼ばれる男性労働者が大勢いたが、女性労働者は見たことがない。しかるに、日本には女性労働者が存在するのだ。

また、窓外に見える馬車を御するのに、御者が自分も馬と並んで歩いている光景にも、異様な印象を受けた。満州大陸では中国人の御者は馬に乗り、長い鞭を打ち鳴らし、ときには馬の尻を鞭打って馬車を走らせる光景を見慣れていたので、御者が馬車に乗らずに馬と並んで歩くということは、愛する馬に重量負担をかけるに優しい思いやり、馬への愛情が察せられ、国民性の違いをまざまざと痛感させられた。

引揚列車が広島駅を通過するときには、広島市街が丸焼けの焼け野原で、はるか向うの彼方まで見通せる原爆被害の実相には言葉を失った。今後、数十年間にわたり草木が育たないと聞かされていたが、背筋の凍る思いをさせられた。

列車は、各駅に停車し下車する者が続き、積み込まれた荷物も、人と共にだんだんと減っていった。大阪

駅を通過するところには、やっと座席に座ることができ
る状態になった。そして、一般の人たちが乗車して来
るようになった。会社員風の中年の男性が、私たちが
引揚者と分かり話しかけてきて、敗戦後の内地の生活
ぶりなどを話してくれたが、想像以上に落ち着いた生
活が営まれていることを知った。意外に思ったのは、
広島・長崎への原爆投下は言うに及ばず、国内主要都
市が米軍機により無差別爆撃を受け、日本全土が焼け
野原と化したのだから、敵国アメリカに対する恨み辛
みや、えんさの声が巷に満ちあふれているに相違ない
と想像していたが、現実はさにあらず、子供たちは「カ
ム・カム・エブリボデイ」と英会話を身につけ、「ギブ
ミー、チョコレート」と言って米兵に群がり後を追う
光景が、あちらこちらで見られたということ、この
中年男性は淡々とした口調で話してくれた。